

古代檜隈の渡来文化（上）

長谷川 透

第1章 はじめに

檜隈地域は明日香村の西南部に位置し、欽明天皇陵や天武・持統天皇陵をはじめ高松塚古墳・キトラ古墳などの壁画古墳が分布し、いわゆる飛鳥時代の奥津城や藤原京西南部の陵園や葬地として理解されている。飛鳥西南部は古代から檜隈郷とよばれ、渡来系氏族東漢氏の本拠地と考えられてきた。『続日本紀』によれば、檜隈地域には渡来人やその子孫たちで満ち溢れ、他姓のものは2、3姓のみであるという。檜隈地域に所在する高松塚古墳やキトラ古墳、檜隈寺など大陸文化の影響を色濃く見せながらも、それ以外では顕著に渡来系要素を示す遺構・遺物は少なかった。一方、檜隈周辺部や飛鳥藤原地域では渡来系文物が認められ、応神、雄略朝に渡来した今来才伎や倭漢氏との関連が指摘されている。

近年、キトラ古墳から檜隈寺一帯を飛鳥歴史公園の建設が予定され、これにより檜隈地域の中心部の発掘調査が進められた。調査の結果、檜隈寺周辺でL字形カマドや大壁遺構などの渡来系の遺構・遺物が確認され、檜隈中心部にも渡来文化が確実に受容されていることが明らかとなってきた。本稿では、檜隈地域の新資料に加え、これまで知られている飛鳥藤原地域の渡来系資料を検討し、檜隈地域の渡来文化の特質を論じてみたい。

第2章 檜隈地域の調査・研究史

檜隈地域は文献史料や古記録、陵墓の分布をもとにこの地域一帯が渡来人のふるさととして、また飛鳥時代の奥津城として知られていた。かつては於美阿志神社境内にある檜隈寺跡は欽明天皇の菩提寺だという口碑伝説があったと紹介されていたが（天沼1916）、いまでも境内には『古事記』や『日本書紀』に記された宣化天皇廬入宮跡伝承地と揮毫された石碑が立っている。そのほか、出土した瓦などの年代観により檜隈寺を渡来系氏族檜前氏の氏寺と考えられていた（福山1948）。

重要文化財である於美阿志神社の十三重石塔の劣化・倒壊の恐れから石塔の解体修理及び保存処理がおこなわれ、石塔の下から地下心礎と舍利容器が出土し、これが檜隈寺の塔心礎であることが明らかとなった（奈良県1970）。1972年の高松塚古墳の発見は、考古学・古代史ブームが巻き起こり檜隈地域が世間に知られる大きなきっかけとなった。高松塚古墳発見以後、第二の壁画古墳の存在が期待され、檜隈地域でもその探索がなされた。その間に、国道169号線沿いに住宅団地の建設が進み、檜隈寺の西側にある尾根筋から藤原京期の掘立柱建物群が検出され、紀路をのぞむことができる藤原京に関わる官衙施設であると推定された（榎考研1985）。

1979年には於美阿志神社境内にある檜隈寺について村の依頼により奈良国立文化財研究所が発掘調査を実施した。檜隈寺は西面する特異な伽藍配置で、伽藍の主軸が北で23～24度西に振れることが明らかとなり、講堂基壇が瓦積基壇であることや周辺で舶来とみられる金銅製飛天像も出土した（奈文研1980～1983・1987）。こうして、文献史料や発掘成果により檜隈寺が渡来系氏族東漢氏の氏寺であることが確実視された（飛鳥資料館1983）。同時期には1983年に

キトラ古墳で壁画が発見され、古代檜隈郷の範囲を考える上で重要な発見となった。

その後、檜前盆地を貫く村道平田阿部山線や道沿いの住宅開発に伴う発掘調査により、御園アリエ・チシヤイ遺跡、檜前門田遺跡、栗原橋本遺跡、阿部山宮ノ向遺跡が確認され、古代に遡る掘立柱建物や掘立柱塀が検出された（明日香村1991・1994・1997・西藤1984）。近年は、檜隈地域での開発事業は少なく小規模な発掘調査が継続されていたが、国土交通省による檜隈寺とキトラ古墳一帯を飛鳥歴史国営公園化する計画があがり、2009年から造営予定地一帯の発掘調査が行われた。この調査によって、檜隈寺跡周辺で石組L字形カマドを備えた竪穴建物や小金銅仏片、檜前大田遺跡では大壁建物や4・5世紀の韓式系土器が確認された（奈文研2010、檀考研2010・2011、明日香村2012・2013）。このように檜隈地域の中心部である檜隈寺周辺でも渡来系の遺構遺物が確認できたことは檜隈の渡来文化を考える上で重要な成果となった。

飛鳥地域での渡来人研究は文献史料・考古資料を用いて多くの研究がなされてきた。文献などの古代史では檜隈を本拠地とした東漢氏の研究が盛んである。渡来人研究の嚆矢として彼らは「帰化人」と呼ばれ、『日本書紀』などの記述から応神朝にわたってきた帰化人やその子孫は飛鳥檜隈に居住していたということが多くの概説で紹介されてきた。その中で帰化人という呼び方から受ける印象は政治的、国際的な観点からみても彼らの実態を反映していないことから、「渡来人」という呼び方が提言され、現在はほぼ定着されている。飛鳥の渡来人も今来才伎や阿智使主を祖とする東漢氏の居住地として論じられ、於美阿志神社や檜前集落のたたずまい、古代から大きく改変を加えられていない入り組んだ地形が渡来人のふるさととして多くの一般書では紹介されてきた。

考古学では古墳や渡来系要素示す遺構、韓式系土器などの渡来系文物から検討が試みられている。奈良県では発掘調査の進展により渡来系遺物・遺構の事例が増え、県内での事例集成や研究が多く進められている。こうした大和の渡来人研究をまとめたものに青柳氏の論考がある〔青柳2005〕。渡来系遺物・遺構について個別具体的な研究については今回触れないが、そのなかでも檜隈地域について言及したものについて取りあげることにしたい。

韓式系土器と古墳出土資料をもとに分析を行った関川尚功は5世紀代は飛鳥、磐余地域に渡来系の居住地がみとめられ、彼らが古墳の被葬者としてはまだ少数だが、6世紀になると増加すると指摘された。そして、高取町に分布する与楽古墳群の副葬品分析でミニチュア炊飯具、釵子の出土、武器の少なさから古墳群被葬者を文官と推定した（関川1988）。須恵器生産や生産関連遺物（鍛冶工具・ガラス玉鑄型）や古墳副葬品（釵子・垂飾耳飾・ミニチュア炊飯具）、韓式系土器出土の集落遺跡に触れ、大和と河内の生産工房の構造的相違を見出し、東漢氏と西文氏などの渡来人集団による今来才伎の集団の様相の相違と受容体制の相違を指摘し、渡来人は大和盆地の諸河川の下流ではなく中流域から南部に集中し、布留を除いた、忍阪、飛鳥、忍海、郡山などの未開発地域に居住したことを論じた（堀田1993）。

また、飛鳥藤原地域や島庄地域で出土した韓式系土器とその遺跡を検討した西口壽生は、その分布が三つの地点にまとまる様相から、『日本書紀』雄略朝にみえる「手末才伎」らが移り住んだ「真神原」（飛鳥寺下層・石神遺跡・山田道）、「下桃原」（飛鳥京岡）、「上桃原」（島庄遺跡）と整合すると述べ、在来のムラと渡来系のムラの共存関係を指摘した（西口2002）。

一方、鉄器・鉄滓副葬古墳と集落など渡来系遺構・遺物を網羅的に研究した花田勝弘は、藤井イノク古墳や清水谷高貝遺跡を挙げ、鉄滓や鍛冶工具副葬古墳と集落の関係から鍛冶工人集落と墓域について高取群として総合的に理解し、渡来人集住の可能性を指摘した（花田

2002・2005)。

近年では、南郷遺跡群をはじめ奈良県内の遺跡構造を検討した坂靖は、大和の渡来系鍛冶集団と有力豪族と王権との関わりを述べる中で、この地域の渡来系集団は王権によって居住地や生産が直接管理・掌握され、飛鳥地域の開発、先進技術の移植と開発に指導的な役割を果たしていたと論じた(坂2010)。

このように飛鳥・檜隈地域は古墳時代から飛鳥時代にわたって生産・技術・土木など手工業、政治思想・学問などの知識、生産技術を背景とした軍事力を兼ね備えたマルチな渡来人がすみ、それを束ねた東漢氏、その渡来系集団を統率し政治的に利用し、政治手腕を高めた蘇我氏が飛鳥時代を突き動かしていた。飛鳥・檜隈にはそのようなイメージが強く働いている。

第3章 檜隈地域の渡来系文物

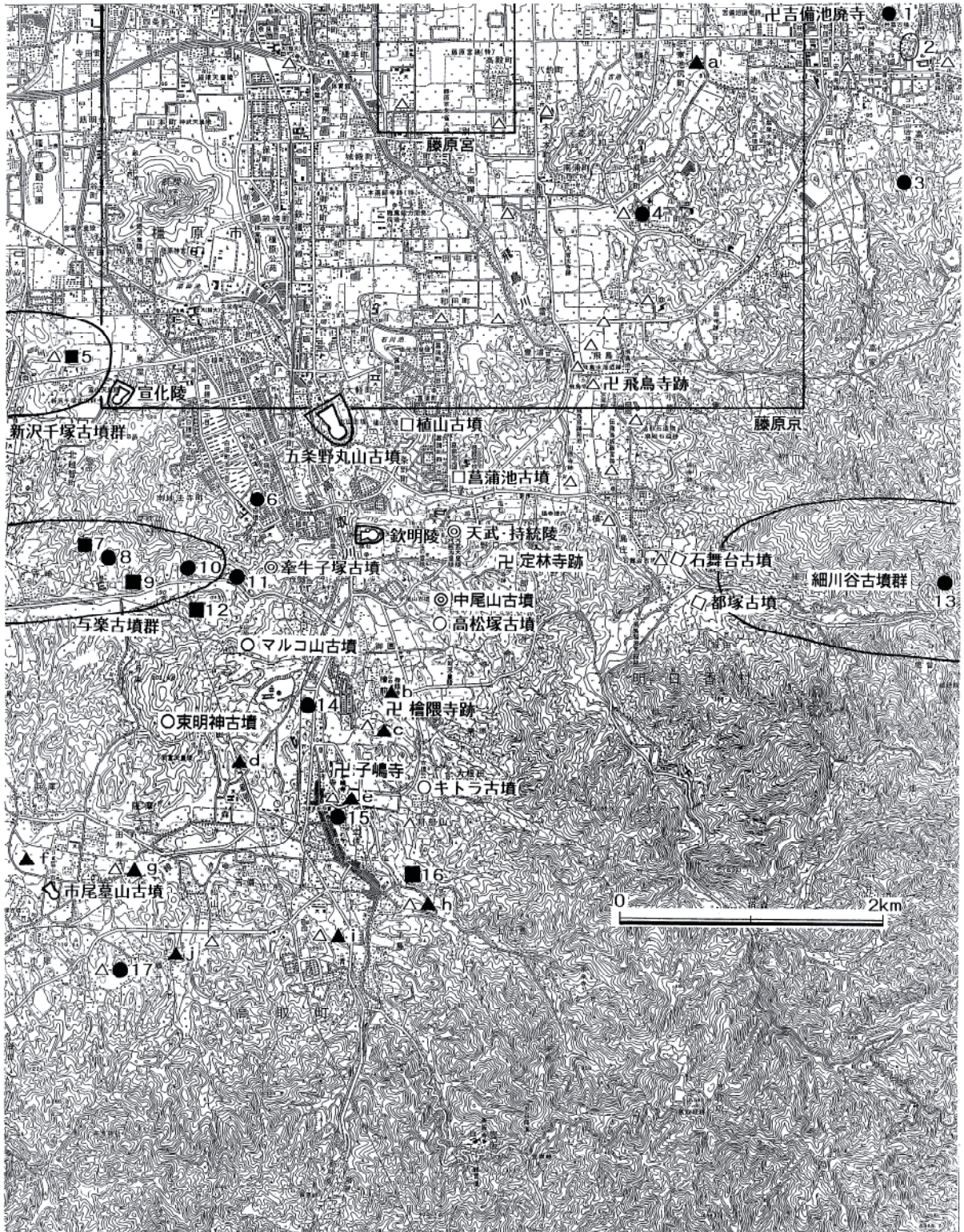
ここでは檜隈地域で新たに渡来系資料が確認された遺跡や寺院、古墳を取り上げることとする。檜隈の範囲については、これまでの研究(相原1998・加藤2002a)をふまえて、北は欽明天皇陵(梅山古墳)との五条野丸山古墳の間にある東西方向の谷筋、南はキトラ古墳のある阿部山大字付近、西は下ツ道・推定紀路、東は定林寺跡のある大字立部付近として論を進めていきたい。渡来人や渡来系氏族は拡大を続けていたため居住地域を厳密に領域や境界を示すことは難しく、居住者の性格や特徴的な地形が目印となって境界が形成されていたと考えられる。

第1節 寺院

檜隈地域の古代寺院には檜隈寺と呉原寺、定林寺がある(大脇1994)。呉原寺は渡来系氏族呉原氏の氏寺と考えられ、『清水寺縁起』に坂上大直駒子が敏達天皇のために建立したとされる。条里に残る地名から呉原寺推定地の発掘がおこなわれているが、伽藍や建物跡は確認されていない(網干1977)。しかし、檜隈寺特有の火焰文軒丸瓦が出土しており、その関連を窺わせる。定林寺は付近の地名「平田」から東漢氏の一族「平田忌寸」との関連が考えられ、平田氏の氏寺と考えられている(大脇1994)。奈良国立文化財研究所により発掘調査が行われているが、渡来系要素を示す遺構・遺物は確認されていない。また高取町大字観音寺にある子嶋寺は、古くは子嶋山寺として史料にあらわれ、『日本書紀』皇極三年の蘇我蝦夷による「長直を大丹穂山に使わして梓削寺を造らしむ」記事との関連を指摘されている(福山1948)。東漢氏の子孫である坂上田村麻呂が京都清水寺建立の際に子嶋寺の僧延鎮に帰依したことも子嶋寺と坂上氏は無関係であるとは言えない。ただ、子嶋寺においても渡来系要素を示すものは確認されていない。

(i) 檜隈寺とその周辺

東漢氏の祖、阿智使主を祀る於美阿志神社境内にある古代寺院。境内には重要美術品の十三重石塔があるが、檜隈寺塔跡の心礎の上に建つ。伽藍は塔を正面にして西に門を構える伽藍配置で、塔を挟んで北の講堂と南の金堂を回廊でつながっている。伽藍主軸は樹枝状に南から延びる尾根に沿っており、北で西に24度振っている。金堂は下成基壇を持つ二重基壇で飛鳥寺に類する構造を備える。講堂は基壇外装が飛鳥で唯一の瓦積基壇を採用している。出土した瓦の検討から西門と金堂が7世紀後半、塔と講堂が7世紀末の順で造営された。伽藍の外側、講堂の北西部では小金銅仏光背片や小金銅仏片が出土した。光背片は北魏様式を残す金銅製飛天像として舶来の可能性がある。一方で小金銅仏片も仏手のみだが鍍金の純度や発色の良さが大陸で確認されている小金銅仏に近く、指の表現技法が白鳳様式より古い印象を与えるとされて



第1図 飛鳥・檜隈地域の渡来系遺跡分布図 (1:50000)

1. 桜井児童公園2号墳(稲荷西2号墳) 2. 風呂坊4号墳 3. 植松東4号墳 4. 南山古墳 5. 新沢126号墳 6. 沼山古墳
 7. 白壁塚古墳 8. 与楽鐘子塚古墳 9. カンジョ古墳 10. 与楽古墳群(ナシタニ支群) 11. 真弓鐘子塚古墳 12. スズミ1号墳
 13. 上5号墳 14. 坂ノ山4号墳 15. 稲村山古墳 16. 阿部山遺跡群(カイワラ1・2号墳) 17. 藤井イノラク12号墳
 a. 大藤原京左京五条八坊(磐余池推定地)(大壁) b. 檜隈寺(石組L字形カマド) c. 檜前大田遺跡(大壁)
 d. 森カシ谷遺跡(大壁・L字形カマド) e. 観覚寺遺跡(大壁・オンドル) f. 市尾カンデン遺跡(大壁) g. 薩摩遺跡(大壁)
 h. ホラント遺跡(大壁) i. 清水谷遺跡ナルミ地区(大壁・オンドル) j. 羽内遺跡(大壁)
 (●:円墳 ■:方墳 ○:八角墳 ▲:遺跡 △:韓式系土器・陶質土器出土地)

いる（明日香村2013）。

檜隈寺伽藍の北西部は、飛鳥時代の遺構・遺物が多く認められる。南東から延びる尾根に沿って北西方向に派生する小さい谷が入り込むため、谷部に寺院関連遺物を含む遺物包含層が形成されている。ここでは前述した小金銅仏片や「呉」とヘラ書きされた軒丸瓦のほか多量の瓦が出土した。これら多量の瓦は最近の調査によって、檜隈寺瓦窯が発見され（森先2014）、窯跡に起因することが判明した。このほかにもL字形カマドを備えた竪穴建物も検出され、建物の埋土から瓦当裏面に格子タタキが施された軒丸瓦も出土している（奈文研2010）。建物埋土から出土した瓦類からみて建物は檜隈寺が本格的に造営される7世紀後半には埋め立てられており、檜隈寺の前身遺構に伴う瓦の可能性が指摘されている（奈文研2010）。このほか講堂から北西50m付近には北西には掘立柱建物や礎石が確認され、さらに北西90mには寺院造営に伴って銀、銅、鉄鍛冶などがおこなわれた金属工房も確認された（明日香村2013）。

第2節 集落・遺跡

古墳以外では清水谷遺跡ナルミ地区で大壁住居の検出を皮切りに、清水谷高貝遺跡、観覚寺遺跡、薩摩遺跡、市尾遺跡で相次いで大壁住居が検出され、観覚寺遺跡ではオンドル遺構も確認された。明日香村との町境にあるホラント遺跡でも大壁建物が検出され、高取町域には渡来系の古墳や遺跡が展開していることが明らかとなり、古代檜隈郷の範囲が明日香村域を超えて高取町南部の清水谷まで広がると指摘した（加藤2002a・2006）。

(i) 檜前大田遺跡

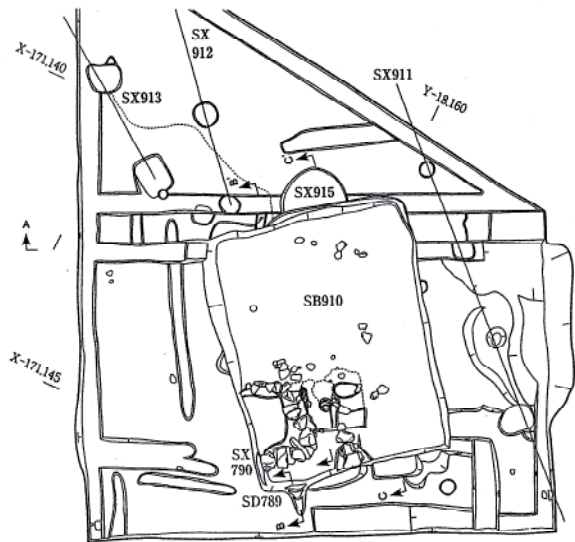
檜隈寺跡から南200mに位置し、寺跡から谷を挟んだ尾根上に立地する遺跡である。檜隈寺造営期に並行する7世紀後半を中心に掘立柱建物群が展開している。尾根筋の形状に沿って掘立柱建物が4群に分かれて展開する。その建物群のある1群から大壁建物とみられるL字状の溝が検出された。7世紀後半の掘立柱建物の柱穴が大壁遺構の溝を掘り込むこと、大壁遺構検出時に7世紀中頃の土器が出土することから大壁遺構は7世紀中頃には廃絶することが明らかとなった（明日香村2013）。また、檜前大田遺跡の西端にある土坑から韓式系土器が出土し（明日香村2012）、この韓式系土器は4世紀後半から5世紀に位置づけられ、応神朝の渡来記事との関連を考える上で重要な資料と位置付けている（高橋2013）。

(ii) ホラント遺跡

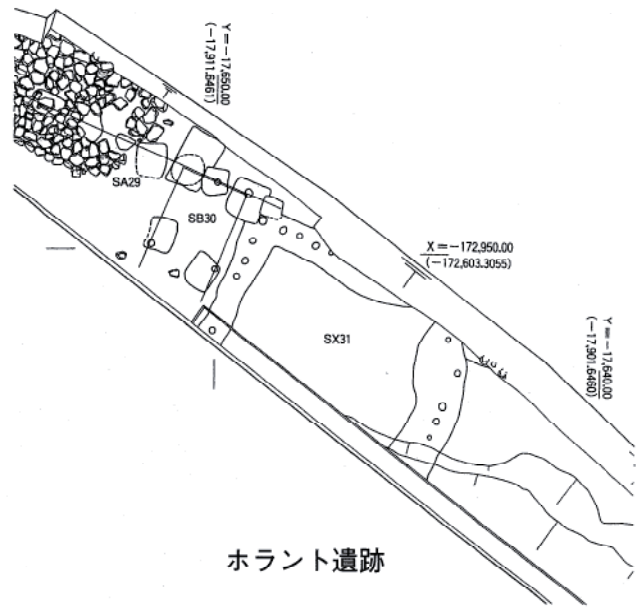
明日香村阿部山と高取町上子島との境界にまたがる遺跡である。大壁建物の布掘遺構を検出した（奈良県2005）。東西幅最大7m、南北3.8m以上で、建物の主軸は北で西に24度振れている。布掘遺構は、幅が0.7～1.3mで深さ1.6mを測る。径20cmの柱を約50cm間隔で並べる。時期は飛鳥Ⅲ期以前に位置づけられる（奈良県2005）。また不明土製品のなかに韓式系土器とみられる遺物も確認されている（坂2012）。

(iii) 観覚寺遺跡

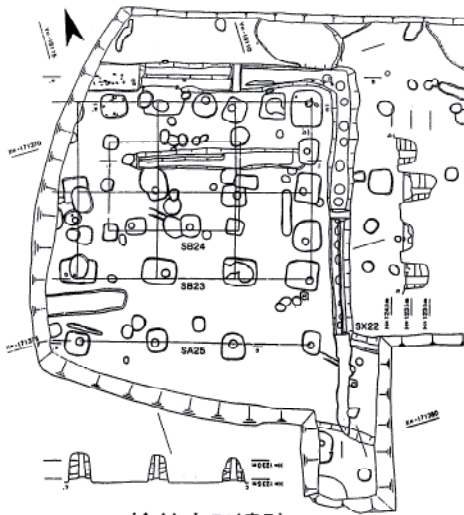
高市郡高取町観覚寺に所在し、檜前大田遺跡から南西に約600mの位置にある。子嶋寺の南で行われた調査で韓式系土器などが出土し、周辺でも渡来系遺構の存在が想定された。その後の調査で6世紀から9世紀までの大壁建物やL字形カマドなどのオンドル遺構が多数確認され、長期にわたる渡来系氏族の拠点的な遺跡と考えられている（高取町2008・木場2008）。なお、現子嶋寺は大字観覚寺にあり、平安時代になり現在の場所に子嶋寺の子院として観覚寺ができ、地名の由来となっている。



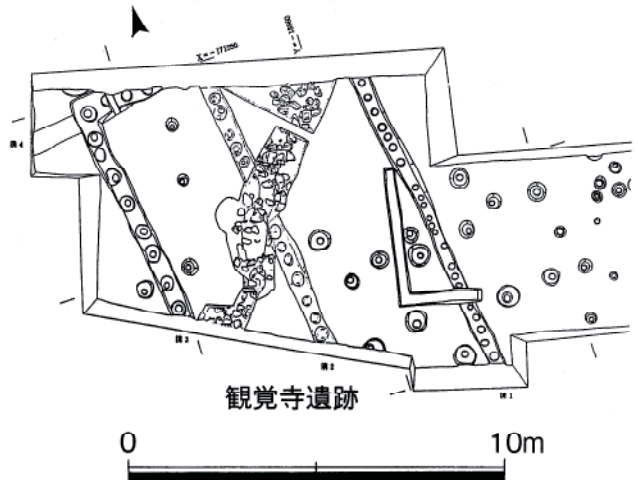
檜隈寺北方



ホラント遺跡

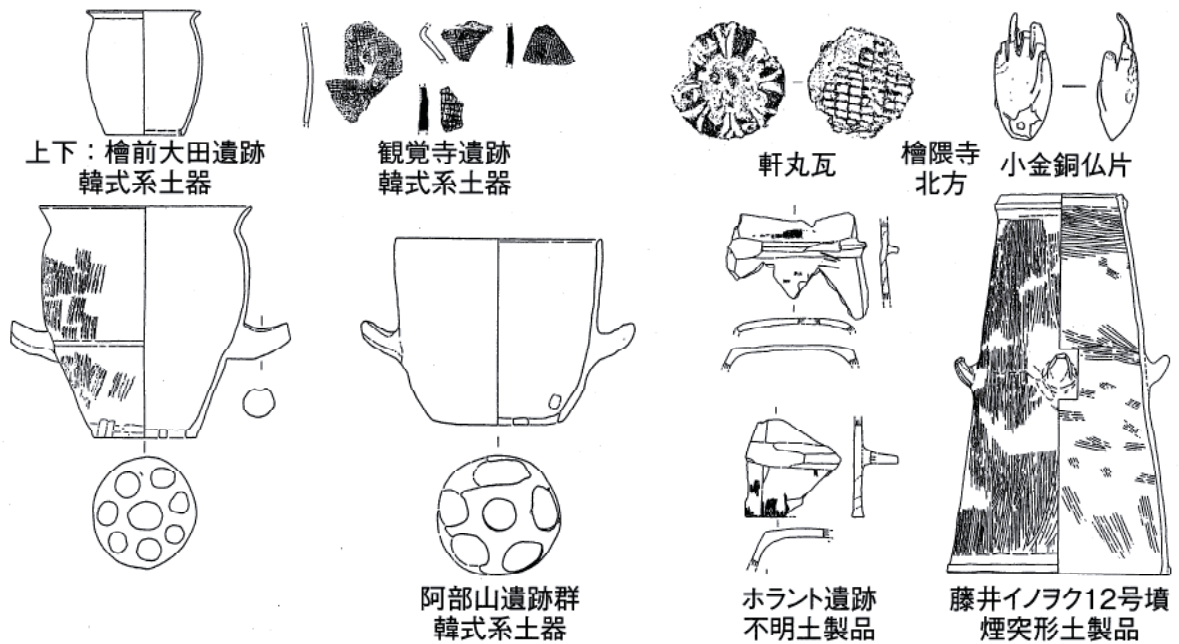


檜前大田遺跡



観覚寺遺跡

第2図 L字形カマド・大壁建物 (1:200) (各報告書から転載)



第3図 檜隈周辺地域出土の渡来系遺物 (各報告書から転載)

(iv)清水谷遺跡ナルミ地区、その他

清水谷は高取町の南端に位置する。5世紀後半の4棟の大壁建物と3か所の大壁遺構、オンドル遺構が検出され、調査区から韓式系土器が出土した（高取町2002・2008）。3回以上の建て替えがあり、掘立柱建物や土塀など7世紀前半頃まで存続するとみられる。その他、高取町内には森カシ谷遺跡、羽内遺跡、薩摩遺跡、市尾カンデン遺跡、松山遺跡、東中谷遺跡などで渡来系遺構・遺物が確認されている。なかでも薩摩遺跡では池跡や堤、木樋が検出され、その池を波多里長檜前村主が作ったと記した木簡が出土するなど重要な発見があった（奈良県2010）。

第3節 古墳

古くは稲村山古墳でカマド型土製品や釵子が報告され、時期が5世紀前半と高取町の渡来系古墳としては古く位置づけられる。このほか藤井イノヲク12号墳では煙突形土製品や鉄滓が確認された（高取町1992）。坂ノ山古墳や与楽古墳群ナシタニ支群もミニチュア炊飯具を副葬し、代表的な事例として挙げられる。その与楽古墳群のなかでも盟主墳として有名な与楽籬子塚古墳、カンジョ古墳、隣接する寺崎白壁塚古墳がそれぞれ発掘され、穹窿状横穴式石室を採用しミニチュア炊飯具を副葬するこれらの古墳を渡来系氏族東漢氏の首長墳と考えている（木場2009）。

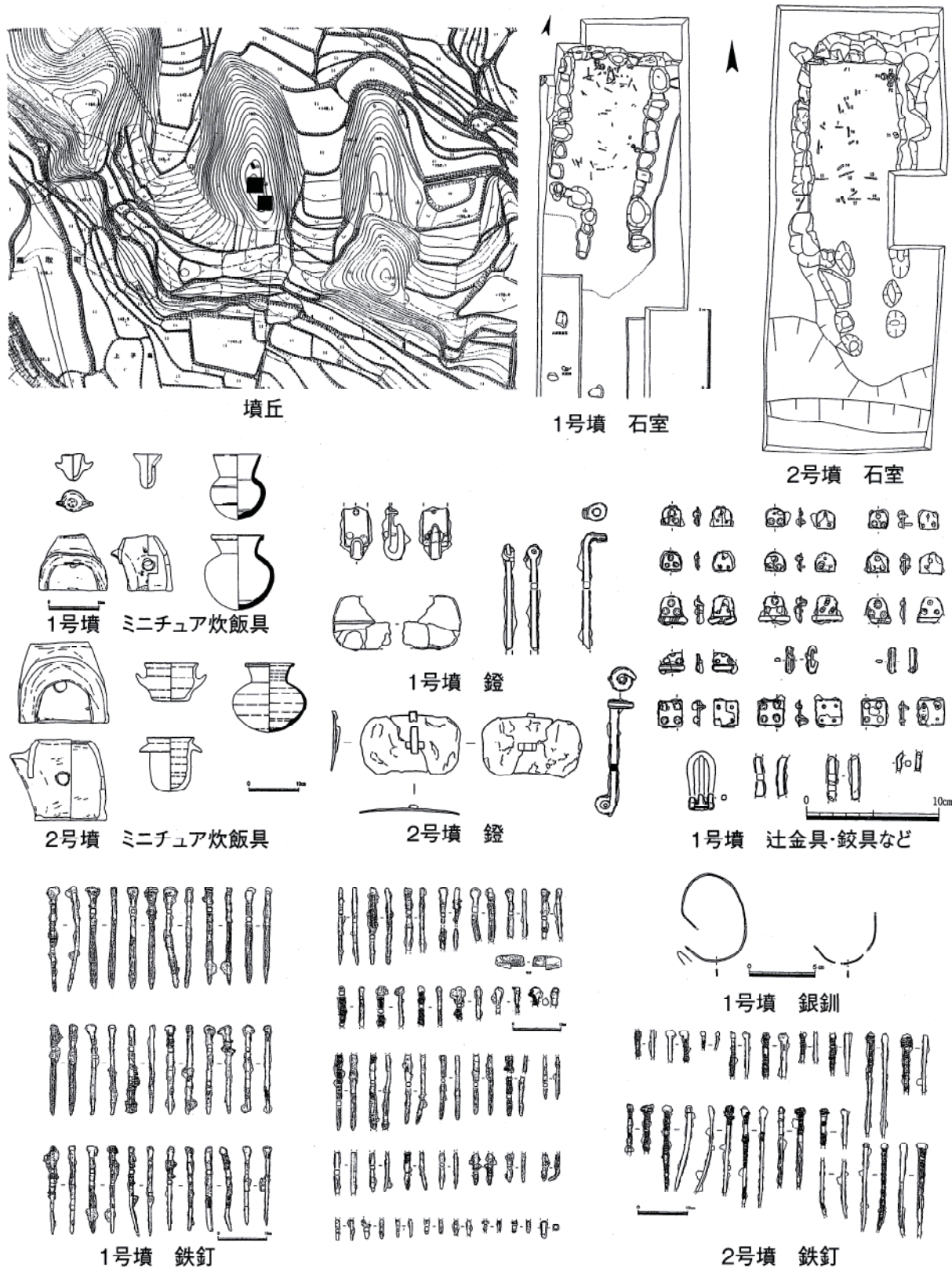
(i)阿部山カイワラ1・2号墳

キトラ古墳の南、明日香村大字阿倍山と高取町が接する尾根上にある。尾根は高取山から北に向いて延びる樹枝状の尾根のひとつに立地する。西側の尾根は古くに土取りで失われているがそこにも古墳があったといわれている。また尾根の南にはホラント遺跡、北側に阿部山遺跡群があり、渡来系の遺構・遺物が顕著である。阿部山地内で圃場整備が実施されるにあたり、明日香村教育委員会が計画予定地一帯を阿部山遺跡群として把握し、古墳が想定される尾根筋については事前に範囲確認調査を実施した。

尾根上には2基の方墳（カイワラ1・2号墳）と木棺墓が確認された。1号墳は一辺約11mで主体部は左片袖の横穴式石室、2号墳は一辺約10mで主体部は左片袖の横穴式石室を設けている。2号墳においては扁平な小形石材が2段分遺存した状況で基底石が確認されたことから、小形石材で積み上げた穹窿状横穴式石室と考えられる（明日香村2011）。石室内から土師器、須恵器のほかミニチュア炊飯具一式、馬具（鉄製楕円形鏡板付轡・辻金具）、鉄釘、銀釧が出土した。木棺墓から6世紀前半の須恵器が出土し、カイワラ1号墳がその木棺墓を壊して築造されていることから1・2号墳を6世紀中頃から後半と位置づけた（明日香村2011）が、馬具の年代観から6世紀前半まで遡る可能性を指摘した（拙稿2012）。

(ii)真弓スズミ1号墳

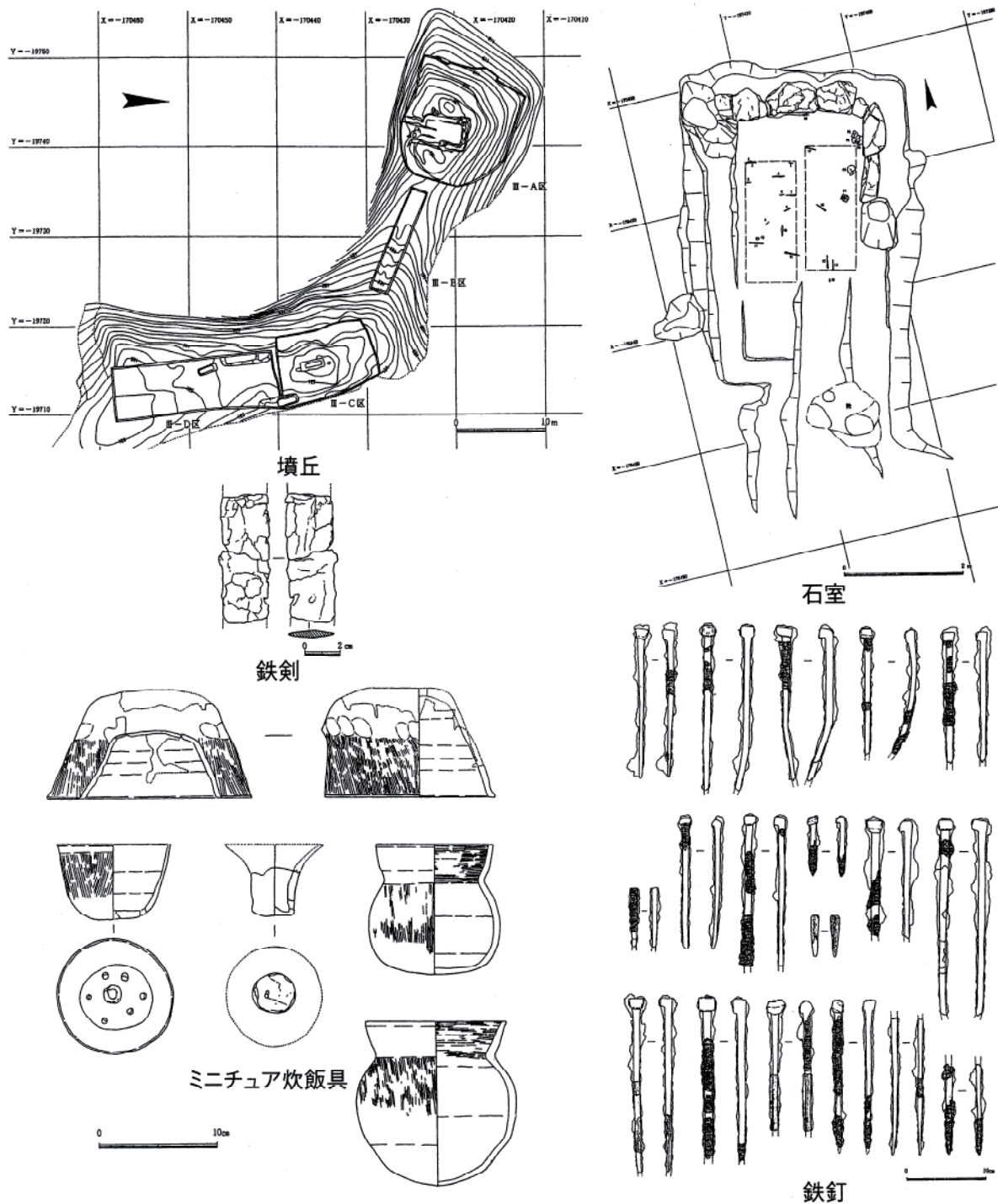
貝吹山の南側に東西に広く伸びる扇状地性低地があり、その南北の丘陵上には多くの後・終末期古墳がある。北側には与楽古墳群をはじめ真弓籬子塚古墳、与楽カンジョ古墳などがある。これらの古墳群に対峙して南側の丘陵上ではスズミ1号墳が確認された（明日香村2008）。スズミ1号墳は一辺約10m、高さ3m以上の方墳で、主体部である石室は右片袖の横穴式石室である。玄室長約4m、幅約2.2m、羨道長2.8m以上、全長6.8m以上を測る。出土遺物はミニチュア炊飯具（甗・甑・釜）、鉄釘18本、鉄剣が出土した。この調査では、スズミ1号墳のほか、木棺直葬の2号墳、土壙墓、木棺墓が検出され、銅芯金貼の耳環が2号墳と木棺墓からそれぞれ出土した。時期を特定できる遺物は出土していない。



第4図 阿部山カイワラ1・2号墳 (明日香村2011)

(iii)与楽鐘子塚古墳

与楽カンジョ古墳の北西に立地する古墳。径28m、高さ9mの円墳で、大型石材を用いた穹窿状石室を備える。石室全長9.6m、玄室長4.2m、玄室幅3m、玄室高4.2mを測る。羨道



第5図 真弓スズミ1号墳 (明日香村2008)

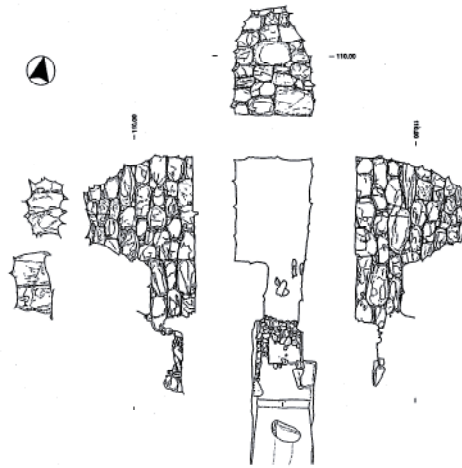
内には閉塞石が残り、20cm大の平坦な石を6～7段積んで衝立状にし、石材の間には粘土を充填している。石室内から土師器、須恵器、ミニチュア炊飯具、耳環、空玉、ガラス玉、銀・金銅製品、馬具（楕円形鏡板付轡、鞍金具、鏡、雲珠、辻金具、三葉文楕円形杏葉、鉸具）、鉄製工具、漁具（鉄製釣針、石錘）、鉄釘、両頭金具が出土した。6世紀後半に築造され、6世紀末までに2回追葬があったと考えられる（高取町2012）。

(iv) 与楽カンジョ古墳

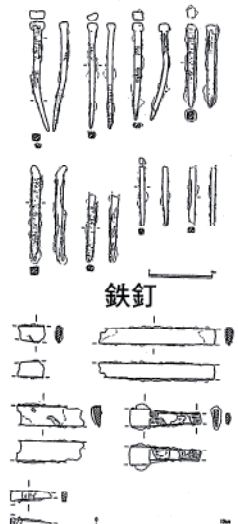
与楽古墳群内にある穹窿状石室を備えた古墳として古くから知られる。墳丘は一辺36m、



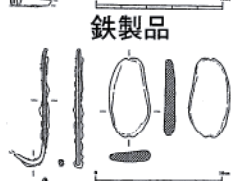
墳丘



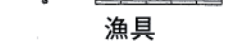
石室



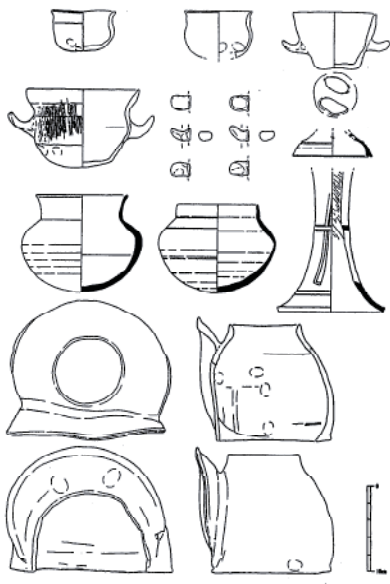
鉄釘



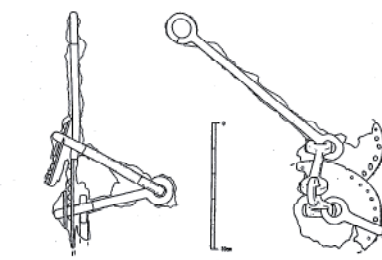
鉄製品



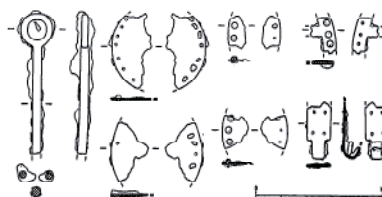
漁具



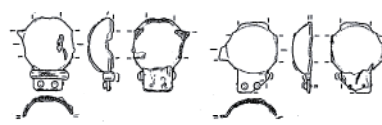
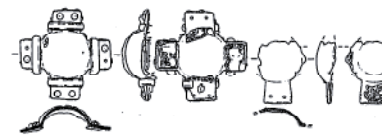
須恵器・ミニチュア炊飯具



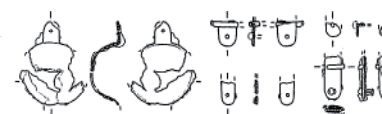
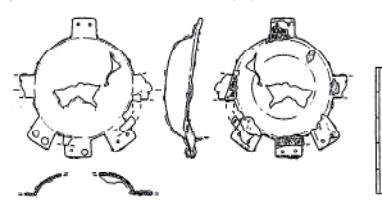
鏡



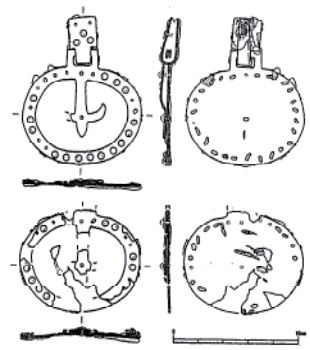
鏡



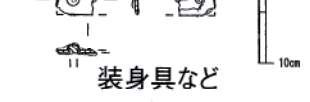
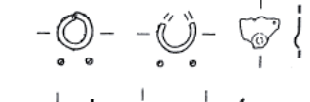
辻金具



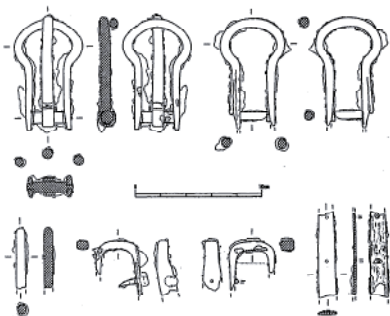
雲珠



杏葉

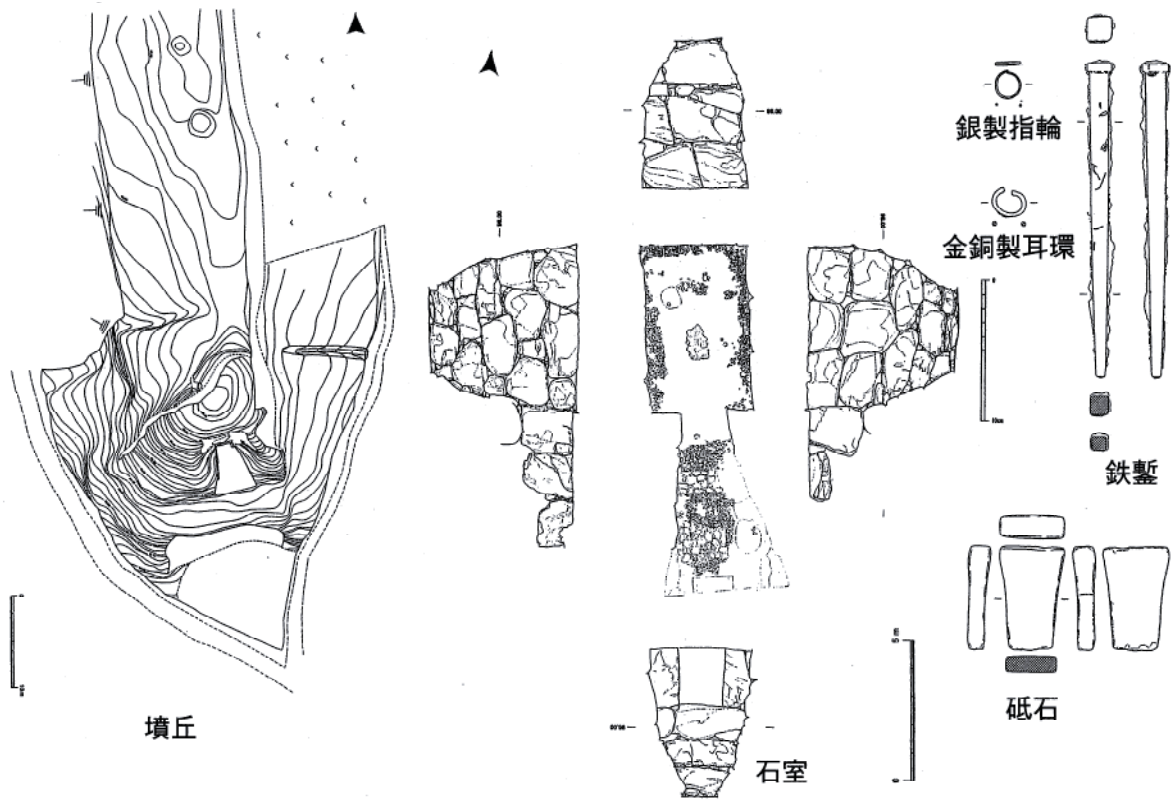


装身具など

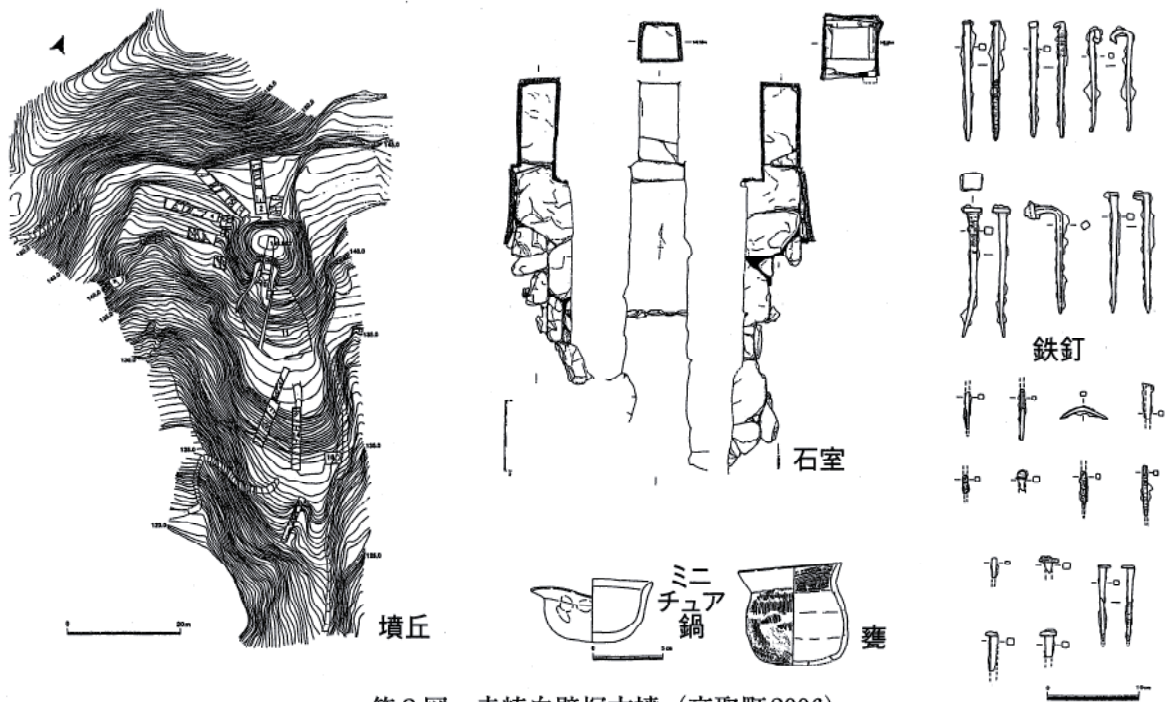


鏡

第6図 与楽鐘子塚古墳 (高取町2012)



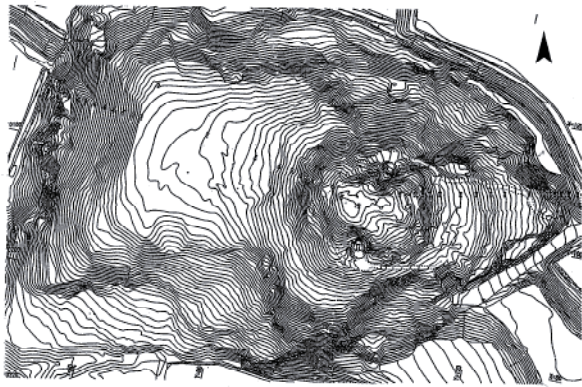
第7図 与楽カンジョ古墳 (高取町2012)



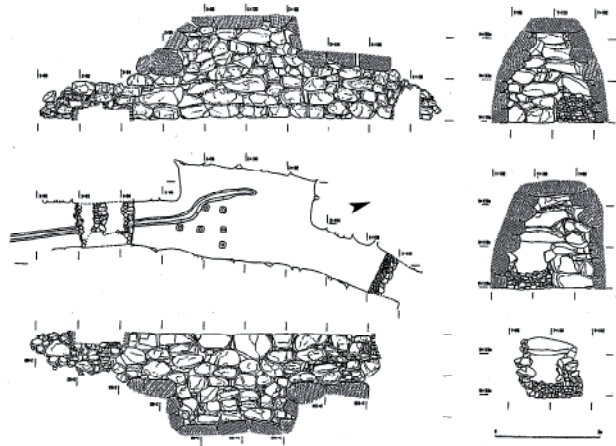
第8図 寺崎白壁塚古墳 (高取町2006)

高さ11mを測る2段築成の方墳である。大型石材を積み上げた穹窿状石室で、現室中央には棺台が設置されている。金銅製耳環、銀製指輪、鉄鑿、砥石、ミニチュア土器の把手が出土した。古墳は6世紀末から7世紀前半に築造されたと考えられる (高取町2012)。

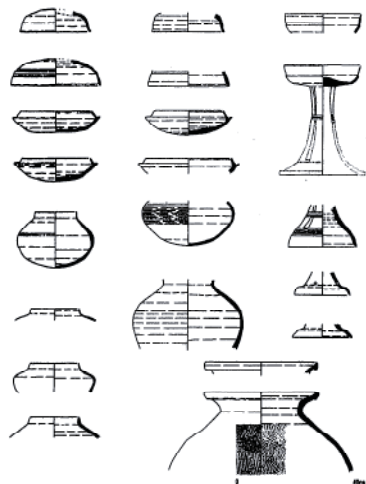
(v)寺崎白壁塚古墳



墳丘



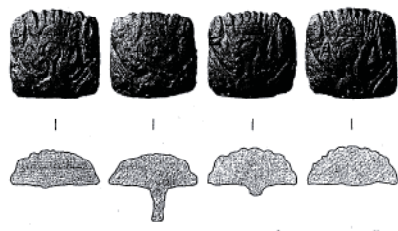
石室



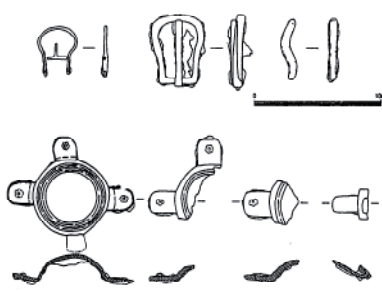
須恵器



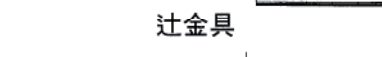
ミニチュア炊飯具



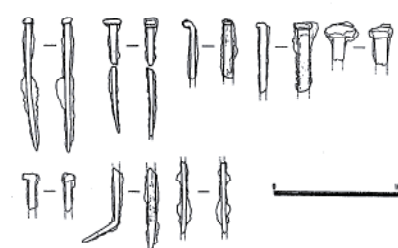
獣面飾金具



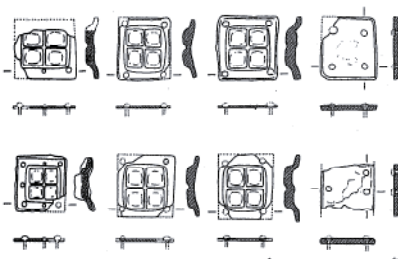
銀象嵌刀装具



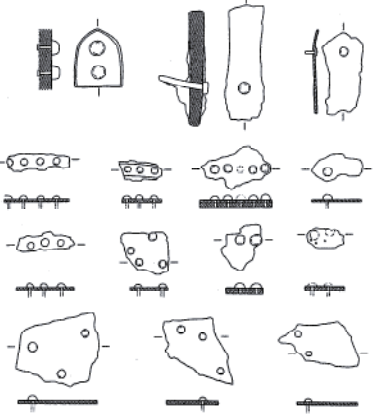
金具



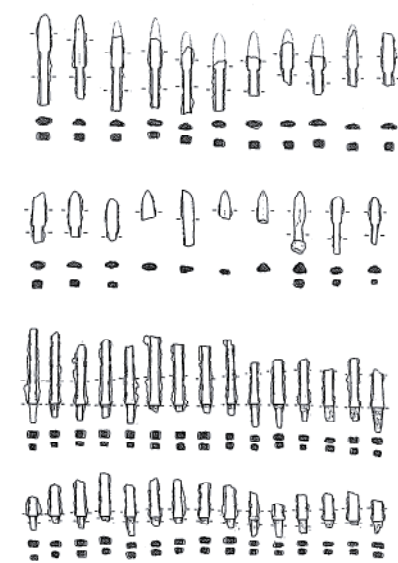
鉄釘



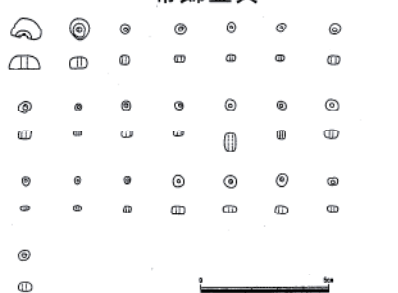
帯飾金具



不明鉄製品

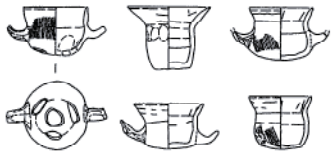
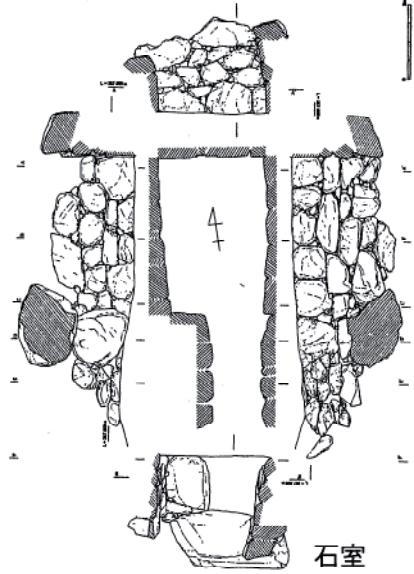
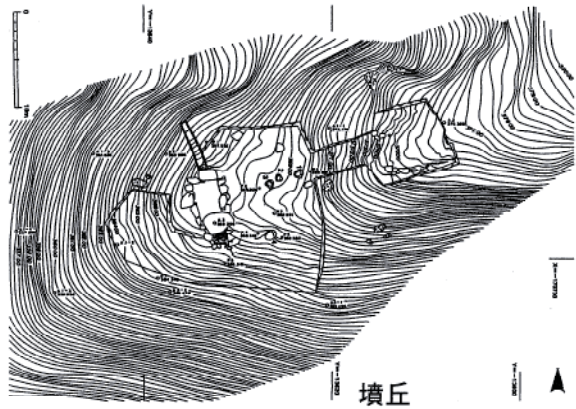


鉄鏃



ガラス玉

第9図 真弓鑑子塚古墳 (明日香村2010)



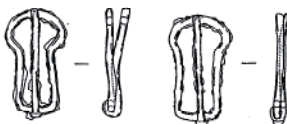
花形飾金具



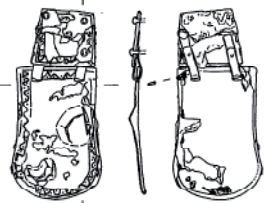
半球形飾金具



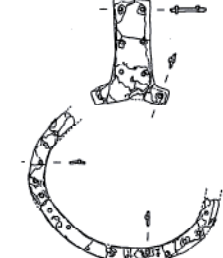
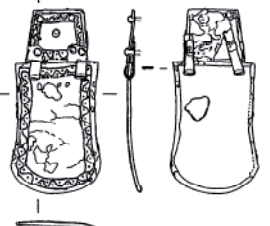
ミニチュア炊飯具



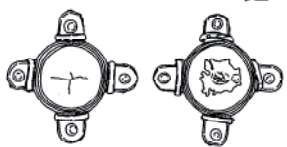
鍔金具



花卉形杏葉



鍔



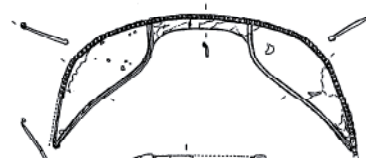
面繫金具



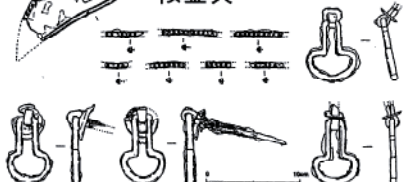
鐵釘



鞍金具



鞍金具



第10図 上5号墳 (樞考研2003)

橿原市の境界に近く、与楽鍾子塚古墳の北西に立地する。墳丘は方台形とも八角形ともいわれ、墳丘南面に壇状遺構があると考えられる。(高取町2006)。埋葬施設は横口式石槨で、石槨の前に前室と羨道が取り付く。全長11mを測り、内面を平滑にした巨石を組み合わせるが、石材と石材の間に漆喰を充填する。石槨内から遺物は皆無であるが、前室からミニチュア炊飯具の鍋、羨門付近から底部穿孔の土師器平底鍋や炊飯具の竈の破片が出土した。木槨に使用された鉄釘も出土した。墳丘や石槨、出土遺物から7世紀中頃に築造された。

(vi)真弓鍾子塚古墳

真弓鍾子塚古墳は与楽古墳群の東側にある単独墳である。古くから石室が開口していたため、羨道が南北両側に取りつき天井部が穹窿状を呈する古墳として早くから知られていた。従前から墳丘については前方後円墳である可能性が指摘されていたが、近年行われた明日香村教育委員会の調査によって、石室規模が石舞台古墳を凌ぐ最大級の横穴式石室であることが判明し、墳丘は径約40mの大型円墳であることがわかった(明日香村2010)。これまでの出土遺物に加え、馬具や獸面飾金具、ミニチュア炊飯具などの出土遺物も新たに確認された。時期は出土した須恵器から6世紀中頃から後半に位置づけられる(明日香村2010)。

(vii)上5号墳

明日香村東部、細川谷古墳群のうちの1つ。直径17m程度の円墳とみられ、大型の石材を利用した横穴式石室である。遺存する天井石から穹窿状天井を備えた穹窿状石室と考えられている。石室内には3つの木槨が埋葬されていた。石室内はかき乱され、石室も崩落していることから、副葬品は3棺のいずれに帰属するかは不明だが、須恵器、土師器、ミニチュア炊飯具、釵子、馬具(花卉形杏葉、辻金具、雲珠、鞍金具、鏡、半球形飾金具、面繫金具)、鉄釘、ガラス玉、銀製空玉が出土した。古墳の年代は6世紀後半から末に築造され、その後埋葬と追葬がおこなわれたが、須恵器では6世紀末、馬具は6世紀前半の様相をみせるなど年代差が認められている(奈良県2003)

(viii)終末期古墳

橿原地域には7世紀代の終末期古墳が多く分布する。終末期古墳において渡来系要素のある古墳を見出すのは難しい。高松塚古墳とキトラ古墳、マルコ山古墳の石室形態は百済王陵の陵山里古墳群の影響が指摘され(猪熊2012)、古墳壁画はまさに大陸からの渡来文化を如実に示している。また、マルコ山古墳の北側に7世紀前半から後半にかけて築造された真弓カツマヤマ古墳や真弓テラノマエ古墳は磚積石室を採用するなど、真弓・橿原周辺でみられる多様な石室形態は被葬者を考える上で重要である(西光2012・2014)。

小結

橿原地域で確認された渡来系の新資料を概観した。渡来系の遺跡・寺院をみると、橿原寺中心部、つまり橿原寺周辺において7世紀代の遺構が顕著に認められる。近くに6世紀代に遡る渡来系遺跡がないことからみても突発的に渡来系遺構が形成されたことがわかる。こうした渡来系の遺構突如形成される背景には、7世紀代においても新来の渡来人たちが橿原地域に押し寄せていたと考えられる。渡来系の古墳では、5世紀後半から6世紀前半に位置づけられる稲村山古墳や坂ノ山古墳、阿部山カイワラ古墳などが飛鳥西南部に多いが、6世紀中頃以降は真弓鍾子塚古墳を嚆矢として与楽古墳群が形成される。このように渡来系古墳の墓域は高取町を中心とした飛鳥西南部から貝吹山南麓の西飛鳥地域に移っていることがわかる。また、7世

紀前半には檜隈寺周辺、檜前大田遺跡、ホラント遺跡のある檜前・阿部山周辺に渡来系の遺構が顕著に認められる。7世紀末になると檜隈寺講堂の瓦積基壇、キトラ古墳や高松塚古墳壁画を最後に渡来系資料はみえなくなる。

檜隈地域の渡来文物を扱うと東漢氏に結び付けられることが多い。今回取り上げた遺跡がすべて東漢氏に結び付けることは難しいが、まったく無関係であるとはいえない。東漢氏は出自が異なる複数の渡来人枝氏がひとつにまとまり、系譜的同祖関係を擬制した氏族集団であり（加藤2006）、壬申の乱では両陣営に分かれて争った経緯があることから、同氏族は一枚岩ではないことは明らかである。東漢氏は集団同士で連帯意識がありながら多様な文化背景をもつため、彼らが残す物質文化も多様であったに違いない。今回の検討の結果、檜隈地域の渡来系遺跡にも画期を認めることができた。しかし、渡来系要素に認定される遺構と遺物を一概に同等な渡来文化の影響とみるべきではないだろう。渡来人が居住し定着していたのか、それとも文物がもたらされただけなのか、今後の検討課題である。飛鳥・檜隈地域における渡来系遺構と遺物の組成や共伴関係を検討することによって、古墳から飛鳥時代における大王と有力氏族、渡来系氏族の集団間関係について明らかにできると考える。

【参考・引用文献】

- 相原嘉之1998「飛鳥地域における古代道路体系の検討」『郵政考古紀要』34冊
飛鳥資料館1983『渡来人の寺－檜隈寺と坂田寺－』
飛鳥資料館2015『飛鳥の考古学2014 縄文・弥生・古墳から飛鳥へ』
明日香村教育委員会1991『村道平田阿部山線改良工事に先立つ発掘調査概要』
明日香村教育委員会1994『明日香村遺跡調査概報平成4年度』
明日香村教育委員会1997『明日香村遺跡調査概報平成7年度』
明日香村教育委員会2008『明日香村遺跡調査概報平成18年度』
明日香村教育委員会2011『明日香村遺跡調査概報平成21年度』
明日香村教育委員会2012『明日香村遺跡調査概報平成22年度』
明日香村教育委員会2014『明日香村遺跡調査概報平成24年度』
明日香村教育委員会2010『飛鳥前代～飛鳥の源流への旅路を往く～』飛鳥の考古学図録⑧
明日香村教育委員会2007『カヅマヤマ古墳発掘調査報告書－飛鳥の磚積石室墳の調査－』明日香村文化財調査報告書第5集
明日香村教育委員会2010『真弓鍾子塚古墳発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書第7集
明日香村教育委員会2013『キトラ公園内遺跡発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書第9集
青柳泰介2005「大和の渡来人」『ヤマト王権と渡来人 日本考古学協会2003年滋賀大会シンポジウム』
青柳泰介2009「橿原地域の「渡来人」と蘇我氏」『季刊明日香風』109 飛鳥保存財団
網干善教1977「呉原寺（竹林寺）とその遺跡・遺物」『仏教史学論集』二葉憲香博士還暦記念会
天沼俊一1916「檜隈寺址」『奈良縣史蹟勝地調査報告書』第三集 奈良縣
猪熊兼勝2012「百濟王陵の飛鳥への影響」『季刊明日香風』124 財団法人古都飛鳥保存財団
大脇 潔1994「飛鳥の渡来系氏族と古代寺院」『渡来系氏族と古代寺院』帝塚山考古学研究所
加藤謙吉2002a「東漢氏と檜前」『東アジアの古代文化』111
加藤謙吉2002b『大和の豪族と渡来人 葛城・蘇我氏と大伴・物部氏』吉川弘文館
加藤謙吉2006「飛鳥と渡来人」『続明日香村史』上巻 考古編
加藤謙吉2010「漢氏と秦氏」『日本の対外関係1 東アジア世界の成立』吉川弘文館
木場幸弘2002「清水谷遺跡ナルミ地区第3トレンチ」『大和を掘る』20 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
木場幸弘2008「高取町内紀路沿いの渡来系氏族の遺跡」『季刊明日香風』107 財団法人古都飛鳥保存財団

- 木場幸弘2009「高取町内渡来系氏族の古墳」『季刊明日香風』109財団法人古都飛鳥保存財団
- 西光慎治ほか2012「真弓テラノマエ古墳の研究」『明日香村文化財調査研究紀要』第11号 明日香村教育委員会
- 西光慎治2014「飛鳥の終末期古墳－飛鳥地域における葬地空間の形成過程－」『特別展キトラ古墳壁画』
文化庁ほか
- 西藤清秀1984「御園チシヤイ遺跡発掘調査概要」『季刊明日香風』12
- 関川尚功1988「古墳時代の渡来人－大和・河内地域を中心として－」『橿原考古学研究所論集』第九
奈良県立橿原考古学研究所
- 拙稿2012「阿部山遺跡群出土馬具の再検討」『明日香村文化財調査研究紀要』第11号 明日香村教育委員会
- 高橋幸治2013「檜前大田遺跡の渡来系土器」『明日香小路 飛鳥京』VOL. 38秋冬号 飛鳥京観光協会
- 高取町教育委員会1992『高取町藤井イノラク古墳群 第4次発掘調査報告』高取町文化財調査報告第12冊
- 高取町教育委員会2006『観覚寺遺跡発掘調査報告Ⅱ（第4次調査）』高取町文化財調査報告第31冊
- 高取町教育委員会2006『寺崎白壁塚古墳発掘調査報告書』高取町文化財調査報告第33冊
- 高取町教育委員会2008『観覚寺遺跡発掘調査報告書Ⅵ（第7・8次調査）』高取町文化財調査報告第37冊
- 高取町教育委員会2012『与楽カンジョ古墳・与楽鎌子塚古墳発掘調査報告書』高取町文化財調査報告第39冊
- 堀田啓一1993「渡来人－大和国を中心に－」『古墳時代の研究 第13巻 東アジアの中の古墳文化』雄山閣
- 奈良県教育委員会1970『重要文化財於美阿志神社石塔婆修理工事報告書』
- 奈良県立橿原考古学研究所1983「桧前・上山遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1982年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所1985「桧前・上山遺跡発掘調査概報Ⅱ」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1984年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所1987『高取町与楽古墳群』奈良県文化財調査報告書第56集
- 奈良県立橿原考古学研究所2003『上5号墳－細川谷古墳群－』奈良県文化財調査報告書第92集
- 奈良県立橿原考古学研究所2005『ホラント遺跡－ふるさと農道緊急整備事業高市地区に伴う発掘調査』
奈良県文化財調査報告書第112集
- 奈良県立橿原考古学研究所2009「国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区整備事業に伴う試掘調査」『奈良県遺跡
調査概報（第二分冊）2008年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所2010「檜隈寺隣接地」『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）2009年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所2010「薩摩遺跡第8次・第10次」『奈良県遺跡調査概報（第三分冊）2009年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2006『海を越えたはるかな交流－橿原の古墳と渡来人』
- 奈良国立文化財研究所1980「桧隈寺第1次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報10』
- 奈良国立文化財研究所1981「桧隈寺第2次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報11』
- 奈良国立文化財研究所1982「桧隈寺第3次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報12』
- 奈良国立文化財研究所1983「桧隈寺第4次（門・東回廊）の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報13』
- 奈良国立文化財研究所1987「桧隈寺第5次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報17』
- 奈良文化財研究所2010「檜隈寺周辺の調査－第159次」『奈良文化財研究所紀要2010』
- 中野咲2013「＜事例報告＞大和地域」『古代学研究』199 古代学研究会
- 西口壽生2002「古墳時代の飛鳥・藤原京地域」『あすか－以前』飛鳥資料館図録第38冊
- 花田勝広2002『古代の鉄生産と渡来人－倭政権の形成と生産組織－』雄山閣
- 花田勝広2005「古墳時代の畿内渡来人」『ヤマト王権と渡来人 日本考古学協会2003年滋賀大会シンポジウム』
- 坂靖2010「大和の鍛冶集団と渡来人」『韓鍛冶と倭鍛冶－古墳時代における鍛冶工の系譜－』鍛冶研究会シンポ
ジウム2010
- 坂靖2010「葛城の渡来人～豪族の本拠を支えた人々～」『研究紀要』第15集（財）由良大和古代文化研究協会
- 坂靖2012「奈良盆地の支配拠点と渡来人」『日韓集落の研究－弥生・古墳時代および無文土器～三国時代－（最
終報告書）』日韓集落研究会
- 坂靖2012「日本畿内地域百済・馬韓系住居址の検討」『甕棺古墳社会住居址』国立羅州文化財研究所
- 福山敏男1948『奈良朝寺院の研究』
- 森先一貴2014「檜隈寺瓦窯の調査（飛鳥藤原第181－4次）」『奈文研ニュース』No.54 奈良文化財研究所